

美術の先生

2024. 12. 16

今まで何人もの美術の先生と出会ってきた。生徒数の減少に伴い、学級数が減ってきている。美術の先生は、その学校に一人というのが当たり前になってきている。あるいは、いないということもある。一人の美術の先生が、数校の美術の授業を担当するというケースも珍しくはない。美術以外の教科を担当することもあり得る。

美術の先生は、全学年、全学級の美術を担当するようになる。教材の準備やらテスト問題作成などなど、大変なことも多くなる。その一方で、その学校の全生徒のことがわかるという最大の魅力もある。美術の先生ならではのことである。

昨年度までお世話になっていた美術の先生は、生徒から絶大なる人気があった。授業を見ると、生徒は集中して取り組んでいる。他の教科では、落ち着きがないような生徒でも、一心不乱に取り組んでいる。なぜこうなるのか。美術教員としての専門性が土台にあるのは確かなのだが、それだけではない。先生の人間性が、一番の要因のように思える。

知り合いの高校3年生のお子さんが、教員養成系の大学の推薦入試に見事合格した。美術の先生を目指すという。その大学では、美術の教員免許だけでなく、小学校あるいは他教科の免許も取得できるようになっている。時代に合ったシステムである。美術の先生は、もはや他教科の先生も兼ねる時代になっている。

そのお子さんは、国語の免許も取得するつもりだという。それならば、私にでも応援できることがある。近い将来、教壇に立てば、美術の先生でもあり国語の先生でもあるという可能性が高い。美術の授業だけでもむずかしいが、国語の授業では、さらに苦勞をすることだろう。美術の授業とはまた違ったむずかしさがある。

そのお子さんが、数年後、教員採用試験を受ける頃は、状況がどのくらい変わっているだろうか。美術の先生の狭き門は変わらないだろう。かえって、国語で採用試験を受けた方がいいかもしれない。学校現場からすると、美術も担当できる国語の先生は、ありがたいことこの上ない。美術と国語を担当するようになれば、かなりのエネルギーを費やすことになるのは間違いない。だが、両教科を担当しているからこそそのよさもある。相乗効果のようなものも期待できる。

教員のベースは人間性である。これからの大学生活で、勉学に励むとともに、人間力を磨いてほしい。それが、教員生活を支えることになる。そして、人気と実力を兼ね備えた素敵な先生になってほしい。